

『太平記』 卷六 「赤坂合戦事」 付

人見本間拔懸事^(注)について

「赤坂合戦」は、作者の好んで描いたものであろう。その点から見て、この章は、作者の筆力と情熱が最も発揮された部分である。作者は、この章の前半が「人見本間拔懸事」であり、その梗概は次のようである。作者は、この章の前半が、死闘のさいに知りし事の上

「太平記」卷六 「赤坂合戦事」付 人見本間拔懸事^(注)は、正慶二年（一三三三）二月、京都へ大軍を送った北条方の二軍による上赤坂城攻撃の次第が描かれている。

この章の前半が「人見本間拔懸事」であり、その梗概は次のようものである。

- (1) 赤坂城攻略に向う大将阿曾弾正少弼は天王寺に逗留し、拔懸禁を布告する。
- (2) 武蔵国出身の老武士人見四郎入道恩阿は、本間九郎資貞に向って先懸の決心を話す。資貞は内心では同感しつつも、自分とは並に行動する旨話す。興ざめて立去る人見の後を、本間は怪しみ人につけさせる。人見は天王寺の石の鳥居に何かを書付け

谷 垣 伊 太 雄

自分の宿所に帰った。

- (3) 人見の決心が変わらぬと判断した本間は、まだ宵のうちに出発し、赤坂城へと向う。途中で出会った二人は、揃って城へ攻め寄せ名乗りをする。城側が応答せず黙殺戦法をとったため、二人は馬より下りて城に攻めかかったが、矢に射られて討死した。
- (4) 付き従っていた僧が二人の首をもらい受け、天王寺に持ち帰って、本間の息源内兵衛資忠に有様を話す。資忠は父の後を追って出立しようとするが、僧に制止される。
- (5) 安心した僧が野辺へ葬礼に出かけた後、資忠は出立する。天王寺で祈念した資忠は、石の鳥居に人見の書きつけた歌を発見し、自分は小指の血でその傍に歌を書き添えて赤坂城へと向う。
- (6) 城兵は、父に孝道を尽くすために唯一騎でやって来た資忠に感

心し木戸を開けてやる。城中に駆け入った資忠は奮戦の後、太刀を口にくわえて最後を遂げた。

(7)三人の死についての批評。「惜哉、父ノ資貞ハ、無双ノ弓矢取ニテ國ノ爲ニ要須タリ。又子息資忠ハ、タメシナキ忠孝ノ勇士ニテ家ノ爲ニ榮名アリ。人見ハ年老齡傾キヌレ共、義ヲ知テ命ヲ思フ事、時ト共ニ消息ス。此三人同時ニ討死シヌト聞ヘケレバ、知モ知ヌモヲシナベテ、歎カヌ人ハ無リケリ。」

(8)赤坂城に向けて出発した阿曾弾正少弼は、石の鳥居の左右の柱に、人見の「花サカヌ老木ノ櫻朽ヌトモ其名ハ若ノ下ニ隠レシ」という歌と、本間資忠の「マテシバシ子ヲ思フ闇ニ迷ラン六ノ街ノ道シルベセン」という歌とを発見する。「父子ノ恩義君臣ノ忠貞、此二首ノ歌ニ顯レテ、骨ハ化シテ黄壤一堆ノ下ニ朽ヌレド、名ハ留テ青雲九天ノ上ニ高シ。サレバ今ニ至ルマテ碑デ、石碑ノ上ニ消殘レル三十一字ヲ見ル人、感涙ヲ流サヌハ無歌ナリケリ。」
 この話が『平家物語』巻九「一二之懸」に拠ったものである事については、早く後藤丹治氏の指摘があり、又、人見達の死を楠木正成論の中で位置づけようとした中西達治氏の論考もある。
 本稿は、それら先学の論を参考としつつ、「人見本間拔懸事」の内容について、その構成を考えてみようとするものである。

まず、人見四郎入道恩阿が「先懸」を決心する場面についてみると、彼は「關東天下ヲ治テ權ヲ執ル事已ニ七代ニ餘レリ。天道缺、盈理遁ル、處ナシ。其上臣トシテ君ヲ流シ奉ル積惡、豈果シテ其身ヲ滅サランヤ」と、社会情勢を因果論的に分析した上で、「今日ヨリ後差タル思出モナキ身ノ、ソワロニ長生シテ武運ノ傾カンヲ見シモ、老後ノ根臨終ノ障」ともなると、老武士としての自分自身を思い、「先懸」の決心するのである。この決心は、内心で同感しつつも表面は反対意見を述べる本間九郎資貞の存在によって、試される形となる。しかし、本間は、人見が天王寺の「石ノ鳥居ニ何事トハ不知一筆書付」たとの報告を聞いて、人見の決意の強さを確認し、本間自身も先駆けへと踏み出す事となる。

大将から「於_レ拔懸之輩者、可_レ為_レ罪科之由」布告があったにも拘らず七十三歳の老武士が行動する以上、それだけの必然性が条件となるはずであるが、それは、先に引用した北条氏の最後を予感する心と功名心とである。人見の行為は、三十七歳の本間が行動を共にした事によって、その予感が客観的に支持されたこととなる。この、禁制を越えて敢て行動に出る点と、人見が石の鳥居に何を書き付けたのが明らかにされないうまま筋が展開してゆく点とに、「太平記」作者の、話を盛り上げる巧みな手法が窺える。

父の死を知った本間資貞の子息源内兵衛資忠は、僧の制止の目をかいくぐり、父の後を追って上赤坂城へと一人で馳せて行く。出発に際して、天王寺の石の鳥居で人見の書を見付け、自分もその傍に小指の血で一首書き添える。この場面ではじめて、人見の書き付け

たのが「歌」であった事が明らかにされるが、歌そのものについては紹介されぬまま資忠の討死場面の描写へと移って行く。その和歌は、寄手の大将阿曾彈正少弼が天王寺を出発する場面で、漸く明らかにされるのである。

結局、この話は、天王寺の石の柱に書かれた和歌を楯円の焦点とでもする形で筋を展開させており、死を決意した老若二人の和歌を、二人の死後明らかにする手法は、その和歌の書かれたのが、西方浄土への入口とも信じられていた天王寺の西門の柱であったという設定や、又、人見七十三歳、本間資貞三十七歳、本間資忠十八歳という年齢構成などと共に、かなり計算された構想と言えるのではなからうか。

三

ところで、次に諸本の記述の差に関して考えてみたい。(注5)

④聖	是マデ	此マテ	ココマ	最後ノ
③本間(子)	資忠	資貞	資忠	資忠
②本間(父)	資貞	資忠	資頼	資貞
①寄手の大将	正少弼 阿曾彈	正少弼 阿曾彈	馬頭 赤橋右	正少弼 阿曾彈
	流布本	玄玖本	西源院本	梵舜本

⑥本間の 子息の 言葉を 聞いた 城兵の 心中	其志孝 行ニシ テ、相 向フ處 ヤサシ ク哀ナ ルヲ感 ジテ	其志ノ 剛ニシ テ義ノ 向フ處 ノ情シ ク哀ナ ルヲ感 シテ	其志ノ 高ニテ、 義ニ向 フ所ノ ヤサシ クアハ レナル ヲ感シ テ	其志高 孝ニシ テ相向 フ処ヤ サシク 哀ナル 由ヲ感 シテ
⑤城へ馳 せつけ た本間 の子息 の言葉	無迹マ テ父ニ 孝道ヲ 盡シ候 バヤ	冥途マ テモ父 ニ事フ ル道ヲ 厚クシ 候ハヤ	冥途マ テモ父 ニ事ウ ル道ヲ アツク シ候ハ ヤ	无迹マ テ父ニ 孝道ヲ 尽シ候 ハヤ
	付従フ テ最後 ノ十念 勸ツル 聖、二 人ガ首 ヲ乞得 テ	屬従テ 最後ノ 十念勸 ツル聖 本間カ 頸ヲ乞 テ取テ	テ随テ 最後ノ 十念勸 ツル由 來ノ人 本間カ 頭ヲコ ウテ	十念ノ 爲是マ テ付順 ヘル聖 二人カ 首ヲ乞 得テ

右表④を見ると、流布本・梵舜本が「二人ガ首」をもらい受けたとしているのに対し、玄玖本・西源院本は「本間カ頭(頭)」としている。この場合、本間の子息が攻め込んで行く話に直接繋がって行く点からのみ考えれば、「本間ガ首」で良いとも言える。ただ、従軍聖が本間に専従する人でなかつた以上、当然「二人ガ首」をもらい受けるはずであろうし、和歌をめぐつての人見と本間の子息との関わりを考えると、聖が「二人ガ首」をもらい受けて帰る「始ヨリノ有様ヲ語」つたからこそ、本間の子息は石の鳥居で「我父ト共ニ討死シケル人見四郎入道ガ書付タル歌」を発見した時、自分も一首書添えようと思つた、と考える方が自然であろう。つまり、「太平記」の成立と時衆教団との関係と言うような大きな問題は今ほさて置くとしても、少くとも流布本・梵舜本の作者が、話の筋を理屈の上から整備している事は確かだと言えるのではなからうか。この事は、⑤・⑥を見ると、流布本・梵舜本が「孝道」を強調する形でまとめている点とも重なる一つの傾向と言えさうである。

なお、更にこの段落の後半「赤坂合戦事」を見てみると、玄玖本・西源院本と流布本・梵舜本との二系統の叙述がある事が明確になる。ところで、この赤坂合戦譚の末尾には、城に立て籠つた兵達が、降参して城を出ても命は助かるとの大將間の協定を信用して、降人になって出たところ、実際は、二百八十二人全員が六波羅に送られ首を刎ねられてしまった事を叙した後に、「吉野・金剛山ニ籠リタル兵共モ、弥獅子ノ齒嚙ヲシテ、降人ニ出ント思フ者ハ無リケリ。」「罪ヲ緩フスルハ將ノ謀也」ト云事ヲ知ラザリケル六波羅ノ成敗

ヲ、皆人毎ニ押ナベテ、悪カリケリト申シガ、幾程モ無シテ悉亡ビケルコソ不思議ナレ。情ハ人ノ為ナラズ。餘ニ橋ヲ極メツ、雅意ニ任テ振舞ヘバ、武運モ早ク盡ニケリ。因果ノ道理ヲ知ルナラバ、可有心事共也」との結語がある。しかし、右の引用文中「罪ヲ緩フスルハ……」以下の文章が、玄玖本・西源院本にはない事を知る時、流布本・梵舜本が諺をも引用しつつ「因果ノ道理」でこの合戦譚をまとめようとしている事がよくわかる。しかも、その道理が、前半の「人見本間拔懸事」に於ける人見の予感(北条氏の滅亡)の確認ともなり得ている点で、流布本・梵舜本作者の視点を窺う事ができるのではなからうか。

四

後藤丹治氏は「太平記の作者は本間又太郎兄弟等の先陣話や、本間九郎父子討死の史實等を傳聞して、かういう風に敷衍潤色して来たのであらう。しかもその潤色の媒介物となつたものは、これも平家物語であつたかと私は思ふ。」と述べて、「人見本間拔懸事」を一連の「平家物語」を原拠とした話の中に位置づけておられる。

確かに「太平記」は、後藤氏が「これ程の一致点があるのに關涉がないとは到底思はれない。」と言われるごとく、さまざまの箇所で「平家物語」と同じ表現又は類似する語句を使つてはいる。その意味で「太平記」が「平家物語」に拠つた事は否定できないであらう。

ただ、「平家物語」に於ける熊谷直實・直家父子と平山季重との先駆けが、勝算あつての功名心と結びつくものであつたのに対し、「太平記」に於ける人見と本間父子との先駆けは、功名心だけでなく自分達の所屬する鎌倉（北条）方の滅亡を予感しての行動であつた点に於て、決定的な違いを見せている。

そして、この話の構成における差異は、二作品の構想の違いとして捉えるべきであり、一致点を踏まえた上で、むしろ違いの意味を考へることが、肝要なる課題となつてきているように思う。

次に、「太平記」巻六は、全六章のうち三章が「天王寺（四天王寺）」に関連している。

「楠出張天王寺付 隅田高橋井 宇都宮事」(巻六の二)では、楠正成が天王寺を根拠地としながら縦横に駆け回つて鎌倉方を苦しめる。その中で、戦わぬまま楠に勝利を譲つてもらつた形となる鎌倉方の宇都宮治部大輔が、「上宮太子ヲ伏拜ミ奉リ、是偏ニ武力ノ非シ所致、只併神明佛陀ノ擁護ニ懸レリト、信心ヲ傾ケ歡喜ノ思ヲ成」す場面がある。

次の「正成天王寺未來記披見事」(巻六の三)では、楠正成が未來記を披覽して、その記文から「天下ノ反覆久シカラジト憑敷」思う。

「人見本間披懸事」(巻六の六)を含め、以上の三章は、それぞれ登場人物が、官方・北条方を問はず、その「運命」にかかわる拠点として、「天王寺」を捉えていると言えよう。

かつて、角川源義氏(注10)が「四天王寺の未來記は『太平記』に重大なものとして語られているが、四天王寺の念仏聖たちによって、西門の石の鳥居にしるされた人見恩阿と本間資忠の血染の歌をめぐり伝承されていた『太平記』の挿話の成立があつたと考えられる。」と述べられた事と重なり合うかと思われるが、やや仮説的に言えば、「太平記」における「天王寺説話」とでも言うべきものの存在を想定しても良いのではないかと考へる次第である。

その場合、村山修一氏(注11)の言われる「こうした(筆者注・天王寺西門に於ける貴族や僧達の西方礼拝や一心念仏行道のこと)念仏の流行は、たとえ西門外の信仰で四天王寺自体のものではなかつたにせよ、四天王寺がもつ太子信仰ならびに仏舍利信仰とは無関係ではありえなかつた。」事や、四天王寺西門における捨身往生の例が多いとの井上光貞氏の御指摘等についても思いを致すべきであろう。

最後に、流布本(ここでは日本古典文学大系本の底本となつている慶長八年古活字本を指す)に見られる傾向については、既に述べた事もあるが、これもやや飛躍的に言うなら、この章段については、流布本には、むしろ近世演劇的構成とでも言うべき要素―それは近世における「太平記」の享受の仕方とも関わつて来るものである―が、一を感じさせるものが窺えるように思うのである。二「三」四」五」六」七」八」九」十」十一」十二」十三」十四」十五」十六」十七」十八」十九」二十」二十一」二十二」二十三」二十四」二十五」二十六」二十七」二十八」二十九」三十」三十一」三十二」三十三」三十四」三十五」三十六」三十七」三十八」三十九」四十」四十一」四十二」四十三」四十四」四十五」四十六」四十七」四十八」四十九」五十」五十一」五十二」五十三」五十四」五十五」五十六」五十七」五十八」五十九」六十」六十一」六十二」六十三」六十四」六十五」六十六」六十七」六十八」六十九」七十」七十一」七十二」七十三」七十四」七十五」七十六」七十七」七十八」七十九」八十」八十一」八十二」八十三」八十四」八十五」八十六」八十七」八十八」八十九」九十」九十一」九十二」九十三」九十四」九十五」九十六」九十七」九十八」九十九」百」

- よる。なお、「流布本」という場合もこの本を指す。
- 2 「太平記の研究」(河出書房・昭和十三年八月刊)「所収の『太平記原據論』」。
 - 3 「太平記論序説」(『日本文学』第十七卷第五号)。
 - 4 「今昔物語」卷十一の第二十一「聖徳太子、建天王寺語」には、「其寺ノ西門ニ、太子自ラ、釋迦如来轉法輪所當極樂土東門中心ト書給ヘリ。是ニ依テ、諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念佛ヲ唱フ。于今不絶シテ、不參又人无シ。」とある。なお藤本篤『大阪府の歴史』(山川出版社)には、「西門の石鳥居ガ永仁二年(一二九四)、忍性が四天王寺別当のとき建立したもの」とある。
 - 5 「玄玖本」は勉誠社版、「西源院本」は刀江書院版、「梵舞本」は古典文庫版、をそれぞれ使用した。なお、比較表中では活字の大きさを一定とし、原本のままとはしなかった。この点については、注4の「今昔物語」の引用文も同様である。ところで、本間父子の名前は、「本間系圖續群書類第五輯)では「能忠一能久一忠綱一資貞一資忠」となっている。太田亮『姓氏家系大辭典』(角川書店)も村上源氏として右と同じ系図を掲載している。
 - 6 金井清光氏の「太平記と時衆」(『時衆文芸研究』風間書房)には、石田善人氏の説として人見恩阿は武藏の人見道場一乗寺の外護者として聖を伴って出陣していた程の信者であったとの引用がある。
 - 7 注6に引用の金井論文には、「人見恩阿と本間九郎のぬげがけの討死とその後日譚は、北条方の楠勢攻撃の本筋から離れた一挿話にすぎないが、それが感動的な文調で太平記の中に書き込まれた事実には、太平記の成立における時衆教団の語りの比重の大きさがうかがわれる」とある。
 - 8 玄玖本では、「罪ヲ緩スルハ将ノ謀也ト云吏ヲ知ラサリケル六波羅ノ成敗ヲ人毎ニ推ナヘテ悪クカリケリト思ヒツ、昨日今日トテ過行ケハ元弘モ三年ニ成リニケリ」との一文があるが、勉誠社版でも明らかに別筆とわかる。なお、この一文が別筆の補入である事は、鈴木登美恵氏の「尊経閣文庫蔵太平記覚え書」(『國文』第十四号)に指摘がある。
 - 9 注2に引用した「太平記の研究」による。
 - 10 「語り物文芸の発生」(東京堂出版)の第二篇第八章「太平記」の成立。
 - 11 「浄土教芸術と弥陀信仰」(至文堂)の「七、院政期における来迎芸術の勃興」。
 - 12 「新訂日本浄土教成立史の研究」(山川出版社)の第三章第二節「聖・沙彌の宗教活動」に於て、四天王寺が西門を中心とする浄土教の靈跡として尊ばれた事を記し、「こゝに詣でた人々は殆ど外来の天台系聖か庶民であるが、四天王寺信仰の右のごとき性格が上述の民間的浄土教と殆ど同じであることにも注意されよう。中でも、占いや託宣によつて往生の安心を得ようとした点や、捨身往生の例の多いことは、ことに留

意せられる。」と述べておられる。

13 拙稿「流布本太平記の一傾向(一)」(『樺蔭国文学』第十五号)

追記

校正の段階で読み得た次の二著について追記しておきたい。

・『軍記物語の世界』(朝日新聞社・一九七八年七月二〇日発行)
 において、永積安明氏は、右の章段をとりあげ、本間資忠の死について言及し、「ここには清朗な『平家』の合戦には見られない、『太平記』独自の世界が、同じ構想の中にも、すでに見えてくるのであって、ここまでくると『太平記』の構想も、もはや『平家』の二番煎じであるとは、いえなくなってしまうのである。」と述べておられる。

・梅谷繁樹氏より、橋俊道氏の『時宗史論考』(法蔵館・昭和五十年三月一日発行)について、御教示いただいた。

橋氏は、右の著書第十二章「太平記にあらわれた時衆の活躍」において、人見四郎入道恩阿について、埼玉県深谷市人見の住人で、『他阿上人法語』に出てくる「人見音阿弥陀仏」と同一人物と見做し、音阿の「大酒飲みで家財道具をも酒代にして、結句の果てには人と争って思慮分別を忘れるといった性格」と、「味方の総攻撃に先立って、軍紀をおかしてまで七十三歳の老武者が、敵の堅陣に単身抜けがけをするという、如何にも荒けずりの坂東武士の性格」とを指摘しておられる。また、本間資貞については、『二祖法語』にあらわれる本間源阿弥陀仏か若しくはその血

縁のものであろう。」として、真教(時宗の二祖他阿真教)が旅先から送った文を引用し、「本間資貞が身を捨てて武恩に報ぜんという人見入道に、おくれをとってはならぬと諸共に、楠の城に決死の朝がけをした思い切った勇武の心底に、真教と浄土にて再会)出来る安心があったことであろう。」と述べておられる。更に、「最後の十念勧めつる聖」については、「恐らく時衆である。それが人見に従っていたかそれとも本間に伴っていたものかわからないが、いずれにしても人見恩阿と本間父子の最後の有様を語り伝えたのは、この聖であったことは確かである。」と述べておられる。

永積氏の論は、本稿で述べようとした二作品の「構想の違い」と言う点で同意見と考える。

橋氏の論は、先行論文の裏付けとして、『天王寺説話』と時衆との関わりについて示唆を与えてくれるものである。なお、『太平記』では、『天王寺説話』以外にも、『住吉説話』等の想定も可能であろう。

(本学専任講師)